新潟県小千谷市真人町藤巻家住宅主屋 下端が片持ちとなる合掌材について

ABOUT ON THE FUJIMAKI'S MAIN HOUSE OF PRINCIPAL RATHER WITH CANTILEVER AT MATTO-TYOH, OJIYA CITY IN NIIGATA PREF.

平山育男 ——— * 1 西澤哉子 ——— * 2

Ikuko HIRAYAMA ——— * 1 Kanako NISHIZAWA — * 2

キーワード：
中門造, 片持ちの合掌, 新潟県

Keywords:
Tyumon-zukuri, Principal rather with cantilever, Niigata pref.

The Fujimaki's main house was built about the 18th century. This house uses principal rafter with cantilever at main part. There was similar instance at the Ohkubo's main house and the Satoh's main house in Niigata prefecture. This method can be considered a technology that was seen until the mid-19th century in the region.

1. はじめに

筆者らは、これまで新潟県中越地方において下端が片持ち形式となる合掌材を有する茅葺建物として国指定重要文化財で魚沼市大倉に所在し、19世紀中期の改修とする旧佐藤家住宅主屋前中門部分、魚沼市大榑山に所在して19世紀中期の建築と考えられる手仕事手ほどき館（旧入広瀬民俗資料館・旧浅井秋雄家住宅主屋）前中門を報告し^{参3)注1}、類例として中世に遡る歴史を有する静岡県西部の本興寺本堂(天文21・1552年)・客殿(18世紀後半)、宝林寺方丈(正徳6・1716年)・庫裏、引佐辻堂(文化11・1814年)、安興寺本堂(貞享頃)・庫裏(貞享頃)、倉泉寺本堂(天保頃)を示している^{注2)}。

前稿において新潟県における事例は中門造前中門部分に限られるものであったが、本稿においては中門造主屋本屋部分の直家部において下端を片持ち形式とする合掌材の使用事例を見出したため、これを複数例報告するものである。

2. 藤巻家住宅主屋について

まず、小千谷市真人町の藤巻家住宅主屋において確認された下端を片持ち形式とする合掌材を主屋直家部分に用いる事例について報告する。

2-1 小千谷市真人町と藤巻家の概要

真人町は市の南端に位置して十日町に接し、昭和30(1955)年に小千谷市と合併した。藤巻家が現在位置するのは真人町において本村と呼ばれる信濃川沿いの地域である。しかし、聞き取りによればもともと当家は丘陵中腹に位置する市の沢と呼ばれる集落に住んでいたものが、この地へ降りてきたと伝承されている。住宅近傍の信濃川にはかつて川港があり、これを通じ藤巻家は通運業にも従事し、近代では真人村(当時)の戸長を務め、住宅は一時、役場を兼ねたとされる。先代から医院を開業し現在に至る。

2-2 藤巻家住宅主屋の概要

・配置と形式、規模

住宅は集落を南北に貫通する県道49号線からやや入った本村の東側、信濃川川原沿にある。敷地は南北120m、東西60m程で、市道の東側に位置する。川原に面しRC造の擁壁があり、居室なども配される。住宅は主屋及び診療棟、住宅棟、地下室、車庫などから構成される。

主屋は南面する寄棟造茅葺の建物で、この正面西側に左勝手となる入母屋造金属板葺妻入形式を主体とする診療棟、東側に切妻造金属葺の角屋があり、これが地下室への通路となる(写真1)。なお、主屋背面に増築した住居棟が切妻妻入形式で取り付く。主屋の規模は桁行19.6m程、梁行13.0m程とする。

・平面

南面する診療棟は正面に入口を張り出す。1階はここで靴を脱ぎ西側に受付を配する。正面が待合室となり、西側に診療室、手術室、調剤室、東側には事務室とレントゲン室がある。待合室正面の扉奥が主屋の廊下へ通じ、主屋の西側に回り込んで患者用の便所がある。2階は廊下の階段から登る。中廊下の構成で東西に2室ずつが配される。東側が表側から6畳と4畳半、西側が6畳ツギノマと8畳ザシキで西側のザシキにトコ、タナが設けられる。

診療棟1階廊下裏からが主屋で、廊下の裏側となる板敷のダイドコの上に田の字型に四室が配する。下手表側がチャノマ、裏側をブツマとする。上手側表はツギノマ、奥をオザシキとしてトコを配し、トコ脇に仏壇を置く(写真2)。主屋上手の廊下を表側に進むと便所と茶室があり、更に廊下を南へ進むと崖の擁壁を兼ねたRC造の地下室となる。地下室は2層の構造で居室、便所、風呂を配する。

・構造

主屋はダイドコなどに立つ独立の上屋柱を0.7尺角、ザシキ回りは0.45尺程とする。チャノマ回りは差物で固め、ザシキ、ツギノマ周囲は長押を巡らす。小屋組は上屋梁7本を架け渡し(写真3)、下端近くにおいて合掌材を桟差鼻栓止めとし、合掌下端は下屋へ片持ちとしてのびる構成とする(写真4)。

¹⁾ 長岡造形大学 教授
(〒940-2088 長岡市千秋4-197)

²⁾ 長岡造形大学デザイン開発研究所

¹⁾ Prof., Nagaoka Institute of Design

²⁾ Researcher of Design Research & Development Center, Nagaoka Institute of Design

図1 藤巻家住宅 主屋桁行断面図

図2 藤巻家住宅 主屋・診療棟1階平面図

写真1 藤巻家住宅主屋概観 南より 撮影はいずれも田村収

写真2 藤巻家住宅主屋ザシキ 南西より

写真3 藤巻家住宅主屋小屋組 西より

写真4 藤巻家住宅主屋合掌材 下先端が片持ちとなっている 南より

2-3 藤巻家住宅主屋の建築年代及び復原考察

・建築年代

主屋からは建築年代を直接示す資料は見出されなかった。

ところで、この建物は昭和37～38(1963～64)年にかけ、宮澤智士らにより調査が実施され、その成果が日本建築学会論文報告集、小千谷市史、新潟県民家緊急調査報告書Ⅱに報告されている。以下、正確を期すため当該住宅についての記述部分を年代順に引用することとする。

“新潟県小千谷市の民家”^{注3)}

居住者氏名／藤巻敏太郎、部落名／真人、建築年代・根拠／享保・200年祭より逆算、本屋規模(桁)×(梁)／7.5×4.5、《中略》上屋柱数／8、柱の仕上／かな《中略》

遺構について見ると、建-1〈浅田壮太郎家住宅：平山注、以下同様〉にはウマヤ中門がなく、《中略》建-2〈藤巻家住宅〉、建-3〈宮栄吉家住宅〉にはある。《中略》上屋柱の数は建-2〈藤巻家住宅〉・建-3〈宮栄吉家住宅〉8本

『小千谷市史』^{注4)}

第一期(十七世紀後半～十八世紀前半)

構造について見ると、太い柱(上屋柱)が多く立っている(浅田家一〇本、藤巻家八本)

『新潟県民家緊急調査報告書Ⅱ』^{注5)}

名称／藤巻敏太郎家、所在／真人、建築年代／享保頃、本家規模／7.5×4.5、備考／中門造

以上をまとめると、藤巻家住宅主屋は享保年代頃の建築となり、その根拠は200年祭からの逆算となる。但し、200年祭に関する資料は藤巻家に現存せず、藤巻敏太郎の子どもに当たり、86才になる現当主はこの点を父から伝え聞いてはいない。

ところで、この周年祭は上記の資料群でも同じ真人町に位置し、後述する安永2(1773)年建築の主屋を持つ大窪栄悦家住宅は、『新潟県民家緊急調査報告書Ⅱ』において

大正十年(1921)に家開創二百年祭を行っている^{注6)}

とする。但しこれは当該地に移住時の前身建物についてのものであり、必ずしも周年祭が現存する建物を対象とはしないことを意味する。藤巻家住宅主屋は上屋柱の本数などに古い要素を持つものの、柱をカナナ仕上げにするなど年代の下る要素もある。

以上のように、藤巻家住宅主屋の建築年代の推定には様々な要因があるものの、ここでは宮澤の示した享保頃(18世紀前期)とする時代を採用することとする。

なお、診療棟は聞き取りによると大正元(1912)年の建築であり、地下室及びそこへ至る茶室などの建築は昭和時代戦前期の建築とされる。

・復原考察

藤巻家住宅主屋についての復原図、現状平面図は前述した報告書類にも掲載されるものの、痕跡図の記載はない。現状の建物では上手諸室柱に板が張られるなど、大規模な改装が近世後期から末頃に行われたと考えられる。

ところで、この主屋における注目すべき点は小屋組である。合掌材は上屋梁に対しては柄差鼻杵止めとし、合掌材の下端は片持ちで下屋に伸ばす形式となっていた。現状では南側の診療棟にかかる部分と北側の住居棟に関わる部分で、当初片持ちとなっていた合掌材

下端が一部切断を受けていることが確認されたものの、それ以外の部分では、片持ちとなる合掌材下端まで確認することができ、切断された合掌下端はいずれも同じ長さまでの片持ち材に復原することができる。

3. 周辺地域で見られた合掌材の下端を片持ち形式とする民家

藤巻家住宅主屋のほか、周辺地域で新たに確認することのできた、合掌材の下端を片持ち形式とする民家の事例を以下で紹介しておきたい。

3-1 小千谷市真人町大窪栄悦家住宅主屋

前述の宮澤による“新潟県小千谷市の民家”によって報告され、小千谷市真人町に位置するとされる安永 2(1773)年建築の大窪栄悦家住宅主屋も梁行断面図を見る限り合掌の納まりは下端を片持ちとする同形式のものとなる^{注7)}。なお、当建物は現存しない。

3-2 魚沼市大倉 国指定重要文化財佐藤家住宅主屋本屋妻面(修理前)

国指定重要文化財である魚沼市の佐藤家住宅主屋は、前稿^{注8)}で述べたように 19 世紀中頃とされる前中門部分において下端を片持ち形式とする合掌が確認された。

ところで、この建物の昭和 55(1980)年における修理前における桁行断面図を確認すると、本屋両妻面における扱首(報告書の記載に従う)は下端が敷梁に刺さっておらず、上手西側の納まりは図面では下端の納まりが明らかではない^{注9)}。そこでこの部分を『新潟県民家緊急調査報告書Ⅱ』に掲載される修理前桁行断面図より確認すると、この建物における両妻面の扱首下端は敷梁下方、即ち下屋側へ延び片持ち形式として納まるものとなっている^{注10)}。修理工事報告書では本屋に用いられる扱首はいずれも当初材とし^{注11)}、屋根妻面の明かり窓は洋釘によるため撤去したとする現状変更における記載^{注12)}はあるものの、下端を片持とするこの扱首材について、技法及び現状変更の記載は見当たらない。

以上の記載から、国指定重要文化財魚沼市佐藤家住宅主屋本屋両妻面の扱首は、昭和 55(1980)年における修理前の段階まで下端部が片持となる形式であったものと判断できる。

4. 近隣における下端が片持ちとなる合掌材の類例について

本稿で紹介した下端を片持ちとする合掌材の事例について、現段階で明らかとなったものを概観しておきたい。

まず、魚沼市域では元文3(1838)年建築の魚沼市大倉に位置する国指定重文旧佐藤家住宅主屋本屋が挙げられ、併せてこの19世紀中期頃の改修に関わる同住宅主屋前中門、19世紀中期建築とする魚沼市入広瀬の国登録旧浅井家住宅主屋前中門に下端を片持ちとする合掌材が確認できた^{注13)}。両建物では前中門の扱首を中門上屋梁先端に胴部分で傾柄差とする納まりは今回紹介した藤巻家住宅主屋の納まりとはやや異なるものであったが、合掌材の下先端を片持ちとする形式は同一と見ることができる。そして小千谷市域では小千谷市真人町に所在した安永2(1773)年建築の大窪栄悦家住宅主屋も合掌の納まりは先端を片持ちとする形式であった。

以上より、魚沼市及び隣接する小千谷市において4件5例に及ぶ合掌材の下先端を片持ちとする事例を確認した。これらは半径15kmと比較的近隣する地域に集中するため、同一の考えに基づく技術と見ることができよう。

また、時代的には藤巻家の18世紀前期が最も遡り、元文3(1838)年の旧佐藤家住宅主屋、安永2(1773)年の大窪栄悦家住宅主屋、19世紀中期頃の旧佐藤家住宅主屋前中門及び旧浅井家住宅主屋前中門とすることができることから、当該地域において、この工法は遅くとも19世紀中期頃までは残ったものと見ることができる。

5. まとめ

茅葺民家の主屋本屋部に下端を片持ち形式とする合掌材を用いる事例として小千谷市真人町藤巻家住宅主屋などを示すことができた。これらの成果をまとめると以下ようになる。

- 1) 藤巻家住宅主屋は18世紀前期に建築が遡る建物で、建物本屋部分において下端を片持ちとする合掌材を用いることが確認された。
- 2) 同様の事例は安永 2(1773)年建築の小千谷市真人町大窪栄悦家住宅主屋本屋部、元文 3(1738)年建築の国指定重要文化財佐藤家住宅主屋本屋妻面においても認められた。
- 3) 藤巻家住宅主屋、大窪栄悦家住宅主屋、旧佐藤家住宅主屋、手仕事手ほどき館(旧浅井家住宅主屋)は半径 15km 圏内に位置し、同一の考え方に基づく技術で、当該地域に 19 世紀中期頃まで見られた工法とすることができる。

参考文献

- 1) 新潟県教育委員会：越後の民家 中越編 新潟県民家緊急調査報告Ⅱ、昭和 54(1979). 3
- 2) 宮澤智士：新潟県小千谷市の民家、日本建築学会論文報告集 99、33～38 頁、昭和 39(1964). 6
- 3) 平山、西澤哉子、梅嶋修：新潟県魚沼市大栃山 手仕事手ほどき館(旧入広瀬民俗資料館・旧浅井秋雄家住宅主屋)と間数組合番付、先端が片持ちとなる扱首組について、日本建築学会技術報告集 44、349～352 頁、平成 24(2012). 2
- 4) 財団法人文化財建造物保存技術協会編：静岡県指定有形文化財(建造物)釣月院本堂保存修理工事報告書、平成 2(1990). 10
- 5) 財団法人文化財建造物保存技術協会編：宝林寺仏堂・方丈修理工事報告書、平成 2(1990). 10
- 6) 財団法人文化財建造物保存技術協会：重要文化財佐藤家住宅保存修理工事報告書、昭和 55(1980). 8
- 7) 平山：新潟県中越地方においてみられる特徴的な番付について、日本建築学会技術報告集 32、373～376 頁、平成 22(2010). 2

注

- 注1) 参考文献3)参照。なお、この稿では当該の材を“片持ちとなる扱首組”としたが、材自体は梁組に刺さらないこと、従来これらの材は“合掌”と呼称されることから、本稿においても下端が片持ちとなるこの材は“合掌(材)”と呼称することとした。
- 注2) 参考文献4)、5) 参照。なお、これらの点については横浜国立大学の犬野敏教授にご教示頂いた。
- 注3) 参考文献2)参照。なお、引用前半は表で、／は表中の改行を示す。
- 注4) 小千谷市史編修委員会：小千谷市史本編上巻、1040 頁、昭和 44(1969). 11
- 注5) 参考文献1) 58 頁
- 注6) 参考文献1) 55 頁
- 注7) 参考文献2) 38 頁
- 注8) 参考文献3)
- 注9) 参考文献6) 図面 15 修理前桁行断面図
- 注10) 参考文献1) 127 頁、修理前桁行断面図
- 注11) 参考文献6) 14 頁
- 注12) 参考文献6) 37 頁
- 注13) 参考文献3)

[2014 年 6 月 17 日原稿受理 2014 年 9 月 2 日採用決定]